

「上海市黄浦江東岸」

設計=アトリエ・リウ・ユーヤン・アーキテクツ

河岸の再生 マッテオ・モスカティーリ

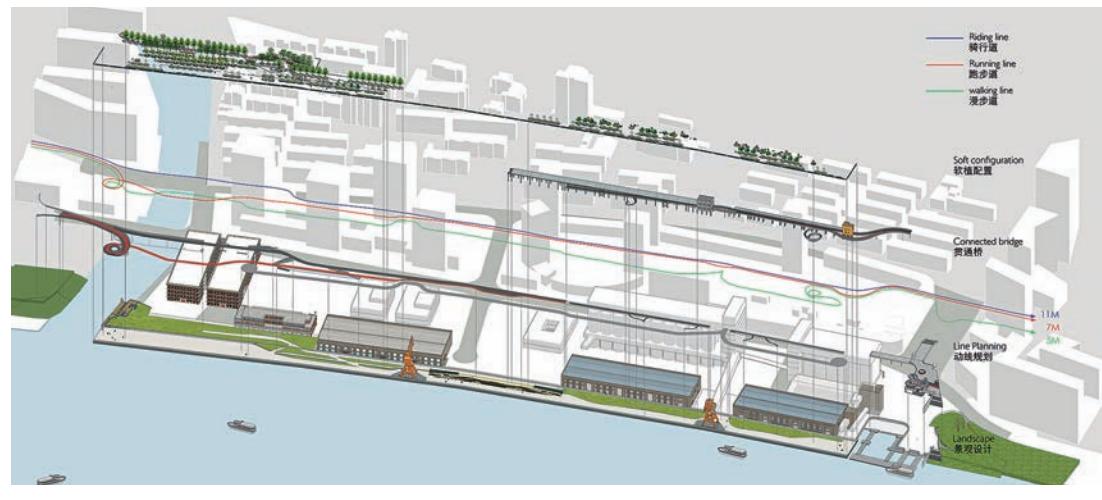
参照 | 本誌pp.6-12

黄浦江東岸にオープン・スペースを作るプロジェクトは、水上バス・ターミナルと楊浦大橋手前の最後の運河との間にほぼ1キロの長さに広がる工業地帯を再生する、明確な再開発事業の一部をなしている。

複合的な建築的介入工事には、6つの建築設計事務所が3つのグループを結成して携わり——アトリエ・デスハウス、アトリエ・リウ・ユーヤン・アーキテクツ、アトリエZ+(中国チーム)、OMA/AMO(オランダチーム)、安田アトリエと日建設計(日本チーム)——2段階に分けて行われた。第1期は共同で進めた研究調査のとりまとめ、第2期は並行して進められた複数の設計スキームの推敲に充てられ、それらを統合した文書が全体のマスタープランに採用された。

事業の対象となった地区は、近くから見ても遠くから見ても示唆に富むパノラマ的環境から恩恵を得ている。西向きの歩道に区切られた背景には、密度の濃い陸家嘴のスカイラインが横たわる。そこから完成したばかりの上海タワーの捻じれたヴォリュームが突き出ている。大きな屋外階段を降りると、河岸に沿って楊浦大橋から外灘の北角に向かう長い区画が伸びる。反対側の舞台袖は建物のファサードによって構成され、そのうちサイロの建物は再利用計画が予定されている。

この区域を構成する建物は、複数段階にわたって実現された建築的介入の結果である。1908年に最初に建物が現れたのに続いて、1920年から1924年まで(第3、第4のドックが完成)、1974年から1976年まで(既存の4つのドック



河岸の交通システム図

クの再建)、1991年から1996年まで(より容積の大きいサイロの建設といつかの倉庫の取壊し)と増改築が重ねられた。

2016年の新ウォーターフロント・プロジェクトは、高い景観的価値を帯びるだけでなく歴史的な発展段階の証拠でもあるエリアを再生し、都市に返す意図から生まれた。

アトリエ・リウ・ユーヤン・アーキテクツが担当した屋外空間の設計の出発点は、その潜在的な利用者の特定であり、それがオープン・スペースを通過する方法とスピードによって人の流れを分けるという選択の決め手となつた。水面とじかに接する一番低い位置のコースは歩行者用とされた。中間の、部分的に下の歩道と接し赤い色彩で区別されたコースはランニング用である。陸側には、先の2つと分離された高い位置にサイクリング・ロードが置かれた。

下層の2本のコースでは、高低差を埋めて以前からある障害物を回避する過程で、介入的工事や既存建築が作り出した川沿いの建築物の多様性を把握できる。また——常に直線とは限らない、カーブや曲がり角のあるコースを進みながら——川岸の延長上でも対岸でもさま

ざまな視覚的突出物を視界に認められる。

東端では、洋涇の緑地帯と1本の橋で縫い合わされる。長さ150mで断面が三角形の構造で支えられた橋は、その進み方——始めは螺旋状でその後に曲線に変わる——と飛び越えた障害物——運河が黄浦江に合流する地点——によって、水面(ホン)の彗星(フィ)のイメージを隠喩的に参照しており、それが橋の名前(フィッシュ・ブリッジ)になった。

褶曲した地形の上には大階段が広がる。これは休憩場所や新たな集団的活動やイベントの触媒として構想された。そこでは市街と同じ高さを再確認し、対岸のパノラマを眺めることができる。川岸の背後にある大きなクレーンは、かつて貨物船から大サイロとその裏の倉庫群に積み荷を移すために使われていた。現在は工業地帯だった過去の触知的記憶となっている。

屋外備品や照明設備は、横断的性質をもつプロジェクトの複数のレベルを体現する。高低差は、移動の場と休止の場との、高く嵩上げされたレベルと中間、水面との関係を象徴的にも視覚的に打ち立てる一貫した原理とし



パノラマ写真

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2019 Arnoldo Mondadori Editore

©2019 Architects Studio Japan

て設定された。

サイロの形をヒントにしてスティールのモジュールを組み合わせたプランターが等間隔に列をなして並べられた。草木を植えたり利用客のベンチになつたりするほか、再生された防波堤の空間体系を構成する要素として設定されている。スティール・バーによる欄干、金属メッシュのスクリーン、木製の手摺り、川沿いに並ぶ別のコンクリート製ベンチが、遠くの高層ビル群への遠近法的眺めを彩る。鉱物質の大平面に自然を呼び戻すために選ばれた常緑樹と落葉樹——白泰山木、樟脳木、黒桑、ミズキ、多種多様な草花——によって、中国的風景のいくつかの特徴が断片的に再現された。

正確で直線的な形態の、柱状もしくは凹んだ光の噴水からなる照明システムは、夜間も川辺に留まるよう誘い、各コースにリズムを刻み、この空間を周辺住民に限定されない多くの人々が使える基準点に変えている。

上海当代芸術館と南京路の歩道のキオスクを実現した後、アトリエ・リウ・ユーヤン・アーキテクツはこのように中国のメガロポリス上海の心臓部で新たな建築的介入を提案した。称賛すべき節制の実践は、屋外空間の再利用の領域において作り手の感性と寸法感覚を確証する。それは、高層ビルとマクロストラクチャーからなる都市において、近年の都市政策が向き合うようになった小スケールと日常の次元に対して新たな関心を促すシグナルと言えよう。

作品:上海市黄浦江東岸

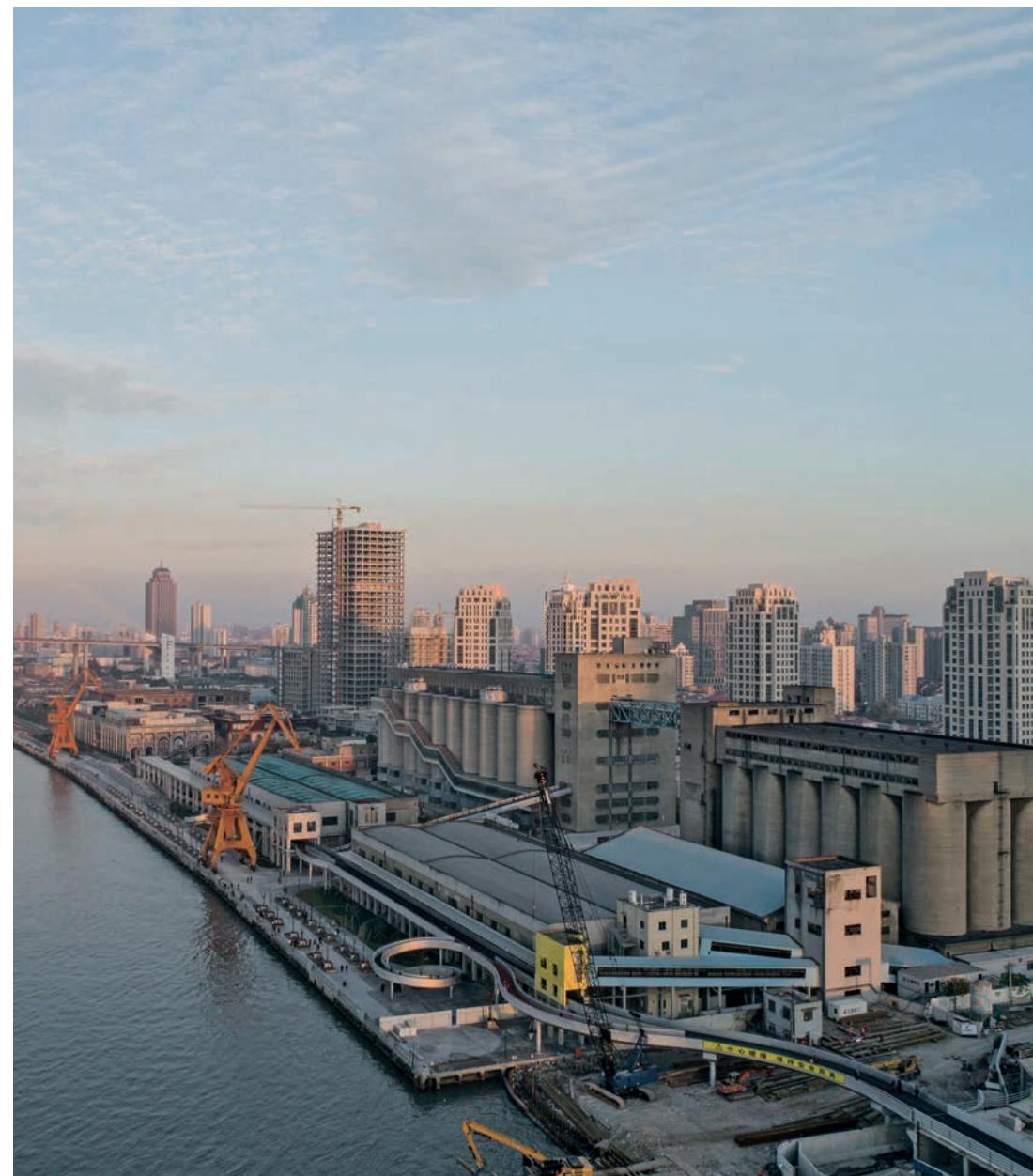
設計:アトリエ・リウ・ユーヤン・アーキテクツ(劉宇揚建築事務所)

建築主:Shanghai East Bund Investment (Group) Co., Ltd

規模:計画面積 2,7191.5 m²

スケジュール:設計・施工 2016-18年

所在地:Pudong District, Shanghai, China



空からの全景



無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2019 Arnoldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan

「キャスミン・ギャラリー/ハイライン・ナイン・ギャラリー」

設計=スタジオMDA

ニューヨークの2つのアート・ギャラリー

マッシミリアーノ・サヴォッラ

参照 | 本誌pp.56-65

戦後のアートを体現する歴史的な人物と、評価の定まつた、または新進気鋭の存命の芸術家とを隣り合わせる厳密な展示プログラムを実行してきたポール・キャスミンは、他のギャラリストに先立って、1989年にソーホーに開いたギャラリーを2000年にチャルシーに移した。それ以後、彼はチャルシー地区——かつてマンハッタンの工業地帯だったが、現在はアートや文化教育の空間が数多く集まっている——での活動を拡大し続け、10番街・27丁目通りの、有名なハイライン[旧鉄道高架を利用した全長2.3キロの線形公園]の近くに複数のギャラリーを開設した。

新たなキャスミン・ギャラリーの設計は、2002年にマルクス・ドシャンツキが設立したスタジオMDAに委ねられた。ドシャンツキは長年ザハ・ハディド事務所に勤務しな

かでもシンシナティのローゼンタール現代アート・センターの設計と施工を担当した。スタジオMDAはポール・キャスミンと長年協働した歴史を持ち、彼のために他の展示スペースや、多くの展示構成をデザインしている。さらに、世界各地のアート・フェアで140を越える展示ブースを作り、多数のギャラリー（そのうちニューヨークに限っても、ボルトラン・ギャラリー、アントン・ケルン・ギャラリー、リッソン・ギャラリー、カーベンターズ・ワークショップ・ギャラリー、リチャード・タイティング・ギャラリー、ナーマド・コンテンポラリー、303ギャラリー、デヴィッド・ノラン・ギャラリーがある）を実現したことから、この分野における確固とした経験を有している。

トップライトから射す光と最大の空間的フレキシビリティを特徴とする、この新しいキャスミン・ギャラリーは、支柱から解放され、大寸法の美術作品の展示に適した広大な展示エリアとして構想された。設計案の最も興味深い点は屋根である。ギャラリーの展示プログラムに従った企画展示用彫刻庭園として着想され、キャスミン・スカルプチャー・ガーデンと名付けられた。こうして屋上——フューチャー・グリーンが整備した——はハイラインの視覚的平面の延長となり、また同時に、年間600万人以上が訪

れるこの高架式プロムナードの大成功を利用して、ギャラリーが売り出す作品を宣伝するための最高のショーウィンドウとなった。キャスミン・ギャラリーは大規模な彫刻作品の展示にも力を入れていることを想起しなければならない。ニューヨークおよび世界各地のパブリック・アート計画に熱心に参画し、近年ではワシントン・スクエア・パークのボスコ・ソーディによる「壁」（2017）、チャルシーのクロード・フランソワ=ゲザヴィエ・ラランヌの「シープ・ステーション」（2013）、香港のPMQガーデンのマーク・ライデンによる「ドデカヘドロン」（2018）を実現した。

ギャラリーの内部では、「ワッフル」・ルーフがコンクリートの格間28個で構成され、各格間に大きなトップライトがひとつずつ設けられた。こうした示唆的な構造グリッドによって、空間を分割する際に最大のフレキシビリティを可能にした（現に、新ギャラリーには私的な「ビュイイング・ルーム」と事務室も置かれている）。道路に面したファサードは、スタジオMDAが設計した他のキャスミンのギャラリーに合わせて、大きなガラス壁と、隅部の正確な施工を可能にする白い自己充填コンクリートの、わずかに凹ませた外壁を特徴とする。外壁の色と構成は、内壁と同じく綿密に計算されている。ファサードを粗削りの仕上げにするため、幅10cmのスマップル材パネルを組んだ型枠が使われた。ピラミッドを切り取ったような四角錐の屋根パネルはMDF（中密度繊維板）パネル製で、プラスティック仕上げとすることで表面を滑らかにし、接合の線を消して天井にモノリスのような外見を与えている。

キャスミン・ギャラリーと並んで、スタジオMDAはハイライン・ナインという新拠点も実現した。芸術のための空間を構想する新たな方法に基づいている。事実、ハイライン・ナインは19世紀のヨーロッパのパサージュを再解釈した、「居抜き」式ギャラリーである。本作でスタジオMDAは、約900m²の単一空間に一連の小規模なギャラリーを配置するというアイデアに力を注いだ。それが「サービス完備ブティック」式の9つの展示スペースで、面積は46m²から120m²まで多様だ。

空間分配のスキームは至極単純である。27丁目と28丁目をつなぐ中央通路に沿って、屋内ショーウィンドウが並び、9つの展示スペースそれぞれの様子が分かる。異なる傾きをつけたコンクリートの床が特徴的な中央通路は、敷地の地形に呼応して天井高を最大にし、一風変わった「躍動する」通路として造形されている。各ギャラ



左にキャスミン・ギャラリー、右にハイライン・ナイン・ギャラリー、上部にハイラインを見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2019 Arnoldo Mondadori Editore

©2019 Architects Studio Japan



キャスミン・ギャラリー: メイン・ファサード



同: 上方より見る

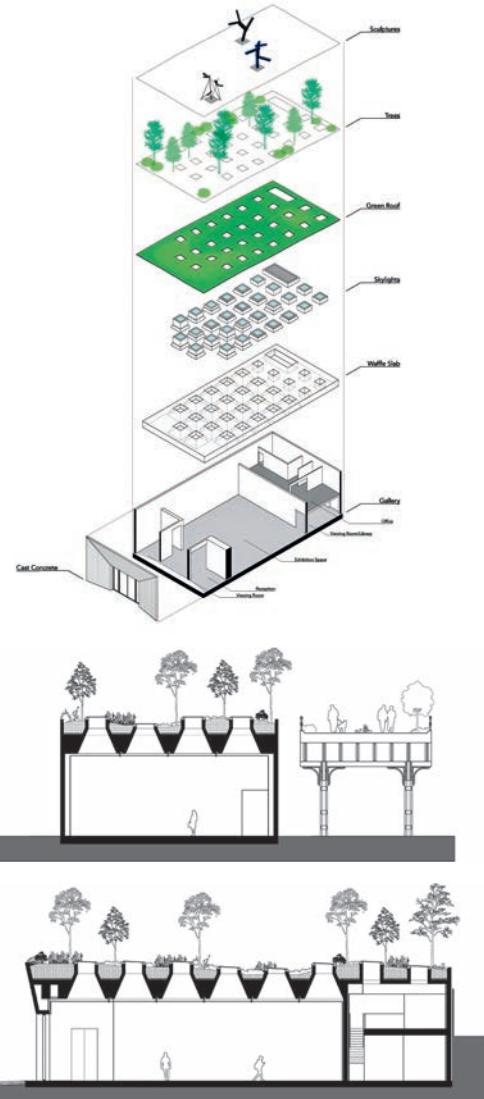
リの入口はメイン・ファサードの形を反復した丸みのある壁となって、展示空間を来訪者に見せている。ギャラリーの上を走るハイラインの鉄柱と梁は、この地区特有の工場の雰囲気を各スペースに与えるよう、剥き出しのまま白く塗装された。伝統的な美術館と同じく、ハイライン・ナインの展示スペースにとっても、人工照明と自然光を巧みに組み合わせた照明システムの設計は、象徴的で親密で心地よいことを同時に求める場に適した雰囲気を与える上で根本的な意味を帯びた(この理由から、28丁目の位置のハイライン入口の近くに、イタリア式のワインバー兼カフェテリアもつくれられた)。

白銅の部材で作られたファサード——ハイラインの真下でキャスミン・ギャラリーへの入口の横に位置する——は、かつて50年間も金属リサイクル工場があったこの場所の歴史を隠喩的に呼び起す。複雑なファサードの製作を、スタジオMDAはボリック・タリックスという、アーティストとの長い協働の歴史をもつ鋳造所に託した。石の物質性とともに鋳造職人の高い技巧を想起させる優美な形態的表現を求めて、建築家たちは1枚のスレート板をスキャニングしてそのテクスチャーを抽出し、デジタル

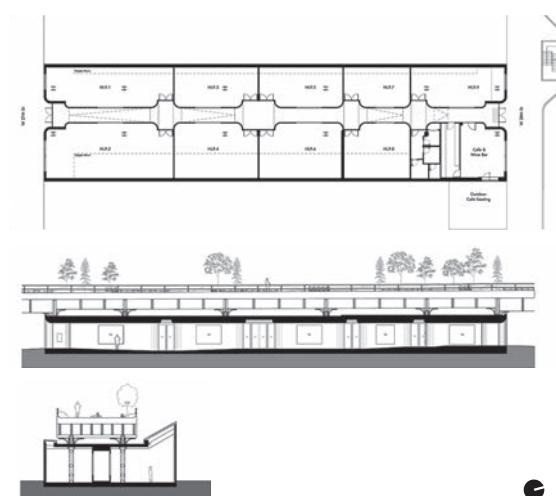
ル加工して——Z-brushというソフトウェアを使い——ファサード全体に適用できるモチーフを作った。このデジタル・モデルに基づく砂型鋳型を使って、白銅の部材が鋳造され、現場で組み立てられる。その結果は建築主、建築家、施工者の実り多き協働の証拠であり、本作の場合、場の歴史のみならず、建築設計における実験と芸術的探究との関係も伝達できるものとなった。



同: ギャラリー内部



キャスミン・ギャラリー: 平面図/断面図/アイソメ図



ハイライン・ナイン・ギャラリー: 平面図/断面図

「M9ミュージアム地区」設計=ザウアーブルップ&ハットン

ザウアーブルップ&ハットン：

M9.美術館ではなく都市の一画

フランチェスコ・ダルコ

参照 | 本誌pp.74-93

メストレの再開発に立ち向かうべくヴェネツィア市政が進める政策が、20世紀におけるヴェネツィア一帯の広義の歴史を実証的に物語る——と当時構想された——ミュージアムの実現というアイデアに具体化されたのは、2005年のことだった。前世紀のメストレは、マルゲラに置かれた工業地帯を支える都市的中枢という機能を担った。1925年から1970年までにマルゲラで操業する企業が35社から227社に推移した一方で、メストレの人口も10倍に増加した。本稿で紹介するこのミュージアムの建設を支持した人々の野望は、文化的サービスの欠乏という過去も現在もメストレが抱える課題に処方箋を与えるための拠点を誕生させることだった。島からなる都市ヴェネツィアが提供するものと比べると、欠乏はさらに明白になる。しかし、この政策の擁護者たちはまた別の野心にも動かされていた。メストレ中心部の再開発と都市構造

の再生に弾みをつけることだ。ヴェネツィア財団は、ヴェネツィア貯蓄銀行がつくった民間非営利法人で、規約や運営に完全な自律性を担保されている。この財団がミュージアム建設計画を推進し、当初予算を1億ユーロと見積もり、実現の費用をすべて出資した。法的資格上許される事柄に沿って事業を進めた財団は、まず、メストレ中心部で最も重要な地区のひとつで、放棄されたか荒廃した建物が一部を占める区域を改変するための詳細な機能的プログラムを作成した。そこでは機能的観点に立ち、約17,000m²に広がる複合的介入工事の実現が想定された。続いて、2009年末に国際招待設計競技を実施し、マッシモ・カルマッシ、デヴィッド・チッパーフィールド、ピエール＝レイ・ファロシ、ルイス・マンシリヤ+エミリオ・トゥニヨン、マティアス・ザウアーブルップ&レイザ・ハットン、エドゥアルド・ソウト・デ・モウラに参加を呼びかけた(これらの建築家が練り上げた各設計案の写真を本誌に掲載した)。2010年に設計競技の審査が行われ、ザウアーブルップ&ハットンが優勝した。対象となるエリアはポエリオ通りに面しており、中心的なフェッレット広場、ブレンタ・ヴェッキア通り、パスコリ通りと連結する一方、第4辺は規模の小さな断片的建物で占められている。設計競技の他の参加者が考えたように、ザウアーブルップ&ハットンの設計案も、ブレンタ・

ヴェッキア通りとパスコリ通りに挟まれたエリアに新たにボリュームを建設してミュージアムとし、16世紀に作られたグラツィエ修道院(1800年代初頭から軍事刑務所)を商業施設にコンバージョンすることが計画された。現在「M9」として知られる新ミュージアムが占めるエリアの位置は、この地区的歩道網を再編するためにザウアーブルップ&ハットンがとった決断によって確定した。それは、彼らが設計した建物に囲まれた新しい広場を、商業スペースとミュージアム・スペースと直接連結できる分岐点に変えるというものだ。建物に囲まれたこの空白部のデザインは、設計競技案から実施設計案に移される際に洗練されていった。広場に面したミュージアムのファサードは、階段室——後述するように、本来は屋内展示室のために建築家たちが考えた最も素晴らしい解のひとつだった——の再設計を経て直線的に変わった。こうして、新しい建物群に囲まれた広場には、地区中心部のフェッレット広場から旧修道院の中庭——屋根が架けられた——を通ってアクセスできる。広場に面してM9へのメイン・エントランスが置かれた。ブレンタ・ヴェッキア通りからも、アトリウムとブックショップを通ってM9の1階に行ける。旧修道院は慎重に改築された。長い回廊に店舗が並べられ、中庭は細い柱に支えられた優美な半透明の屋根で覆われ



広場よりM9の端部を見る



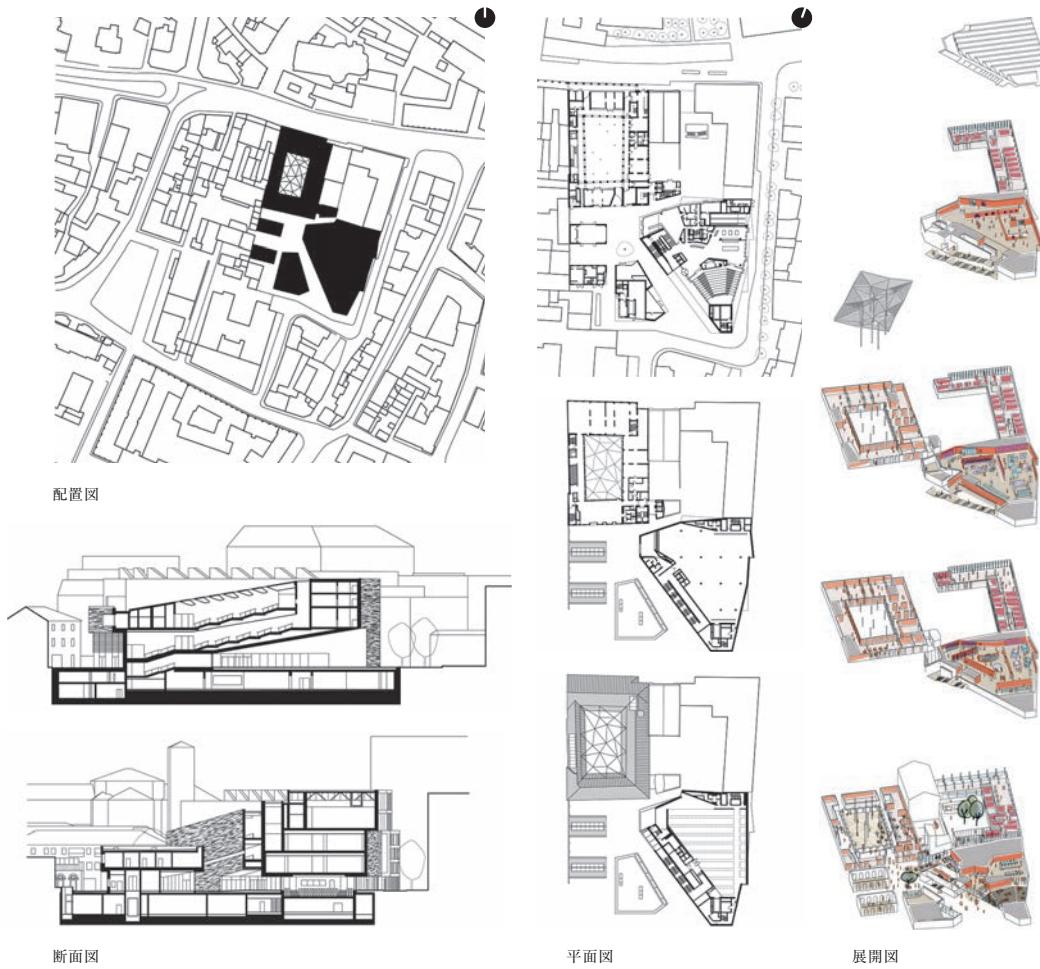
屋根が架けられた旧修道院の中庭



ブレンタ・ヴェッキア通りに向いたファサード

た。しかし残念ながら、柱身に不格好に取り付けられた照明器具の存在によって乱されてしまった。この邪魔者がなかつたら、中庭がよく見通せたはずだ。

完成した建物を見て最初に衝撃を受けるのは、もちろんヴォリュームを覆う被膜である。その設計にあたり、ザウアーブルッフ&ハットンはある建設方法を現代的にアップデートして再び取り上げた。それは、例えば、ベルリンのGSW不動産会社本社ビル(1999)、あるいは2008年のミュンヘンのプラントホルスト美術館(『CASABELLA』780号[2009]および737号[2005]掲載の、より全般的な彼らの仕事の紹介を参照されたい)など、彼らが他のさまざまな仕事で実験してきた表現に関わる選択である。ザウアーブルッフ&ハットンはしばしばゴットフリート・ゼンパーの考察を参考して被覆のテーマを扱う。そのさまざまな手法を説明したい誘惑を抑える必要があるにせよ、彼らの作品を前にすれば、ゼンパーが『様式』の中で、あらゆる形態の被覆の起源となった加工物として織物と陶器を論じた部分を想起しないではいられない。現に、ザウアーブルッフ&ハットンが、M9のケースほど声高でないとしても、彼らの建物の二重の性質を目立たせるためによく用いるのが「セラミックのテキスタイル」であるのも偶然ではない。そこでは外被が構造から軽やかに吊るされて構造を視界から隠しつつ、縦糸も横糸もその織目をはっきりと目立たせ、また被膜を構成する模様それぞれの色彩を鮮やかに打ち出す。M9の場合、その成果がさらに明解になるのが、エントランスに面した広場から出て、ブレンタ・ヴェッキア通りに面したファサードを見た後で館内には入る時だ。そこでは、平面図の端部に当たる位置に埋め込まれたオーディトリアムに出会った後、細長い窓からの光で照らされた長い階段を上っていく。構造と工法の観点からもじつに巧みな解である。階段のデザインを、外被の構想と分断する要素は何もない。階段の各段は、当然ながら新しい広場に面したファサードに支えられており、段を上がる踊り場の手前に背の高い鉄筋コンクリートのポルターユがある。きっぱりとして上品な空間構成を作り出している。ポルターユをくぐると展示スペースにアクセスできる。現在は、ほとんどがインタラクティブな性質のインсталレーションですべて占められているため、展示室の造形を把握することはできない。これらは、M9が提示する20世紀イタリア史を巡る一種の旅に来館者を参加させるために実現された。



広場よりM9のエントランスを見る